

「保育内容 環境」 授業における室内遊具の取り上げ方について

梨本 竜子・山城 いつき

About How to Take up Toys in Classes of the Content of "Child Care Environment"

Ryuko Nashimoto , Itsuki Yamashiro

1. はじめに

保育は「環境を通して行う教育」とされている。子どもが周囲の他者や物などの環境に主体的にかかわり、相互にやりとりをしながら自らの世界を拓けていくことが発達であり、子どもがその成長発達に必要な経験を得られるよう援助する営みが保育なのである。

領域「環境」は、1989（平成元）年に幼稚園教育要領が改訂された際、5領域の1つとして設けられた領域である。改訂によりそれまでの6領域「健康」「社会」「自然」「言語」「音楽リズム」「絵画製作」が改められ、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域に変更された。「環境」は内容的には6領域の「自然」に「社会」を部分的に組み合わせたと捉えることができる。保育所保育指針においても1990（平成2）年に同様の改訂がなされ、幼稚園教育要領と共に5領域のまま現在に至っている。領域は、幼児の発達を見る視点であり、保育者が幼児のかかわる環境を構成する際の視点でもある。領域「環境」は「周囲の様々な環境に好奇心や探究心をもってかかわり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う」ことを目指しており、保育者には、子どもが自らかかわりたくなるような適切な環境を構成する力が求められる。そのため、保育者養成にあたっては、保育の環境構成能力の育成が求められるのである。

前述のように領域「環境」の前身となるのは領域「自然」が主体であり、また現代の子どもの自然体験の不足から、養成課程における「保育内容 環境」の教授内容は自然環境の体験的理解に時間の多くが割かれているようである。自然環境は子どもの五感に訴えかけて感受性を育み、自然を体験することで子どもは身体能力や危機回避能力等様々な能力を身につけていく。保育者となる学生の自然とかかわる機会の減少からも、授業に自然体験を取り入れていくことは必要不可欠なことと考えられる。しかし、フレーベルの恩物を紐解くまでもなく、子どもの主体的な活動としての遊びには、遊具・玩具の存在が重要な役割を担っていることは否めない。その重要かつ身近な保育環境である遊具を、子どもの成長発達に合わせてどのように選択し、園内にどのように配置、構成していくのかについての検討が、保育者

養成課程の現状においては不十分であるように感じられる。

本稿では、保育者養成課程におけるシラバスおよび使用テキストから、「保育内容 環境」授業内での「自然環境」と「室内遊具」の取り上げ方についての現状を比較検討し、そのあり方について考察していく。

2. 領域「環境」

(1) 幼稚園教育要領における領域「環境」

現行の幼稚園教育要領における領域「環境」は、人や自然や遊具、社会の事象などといった身近な環境に主体的にかかわる力を育て、生活に取り入れていこうとする態度を養う観点から示されている。その「ねらい」は、(1) 身近な環境に親しみ、自然と触れ合う中で様々な事象に興味や関心をもつ、(2) 身近な環境に自分からかかわり、発見を楽しんだり、考えたりし、それを生活に取り入れようとする、(3) 身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする、の3項目であり、「ねらい」に基づく「内容」として、以下の11項目が示されている。

- ①自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。
- ②生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。
- ③季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。
- ④自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。
- ⑤身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。
- ⑥身近な物を大切に使う。
- ⑦身近な物や遊具に興味をもってかかわり、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。
- ⑧日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。
- ⑨日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。
- ⑩生活に関係の深い情報や施設などに関心をもつ。
- ⑪幼稚園内外の行事において国旗に親しむ。

内容を「自然環境」と「室内遊具」に注目してみると、はっきりと「自然」・「動植物」に関して記述されている項目は4項目である。遊具を含む身近な「物」に関する項目が3項目、「数量」や「文字」などが2項目、その他の2項目に「情報」・「施設」・「国旗」が記載されている。

また、『幼稚園教育要領解説』（文部科学省、2008）では、「内容の取扱い」の(1)の項目に関して、保育者は、幼児が扱いやすい遊具や用具、物を用意すると共に、幼児の能動性を引き出すように場や物の配置を工夫したり、保育者も一緒にやってみたりするなどの援助が必要であるとし、保育者の環境構成について述べている。

(2) 保育所保育指針における領域「環境」

保育所保育指針の「保育の内容」は、「養護に関わるねらいおよび内容」と「教育に関わるねらいおよび内容」から構成されており、「教育に関わるねらいおよび内容」は幼稚園教育要領と同じく5領域に分類されている。そこでの領域「環境」の「ねらい」は幼稚園教育要領と同様である。「内

容」には、以下の12項目が示されている。

- ①安心できる人的及び物的環境の下で、聞く、見る、触れる、嗅ぐ、味わうなどの感覚の働きを豊かにする。
- ②好きな玩具や遊具に興味を持って関わり、様々な遊びを楽しむ。
- ③自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。
- ④生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心を持つ。
- ⑤季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。
- ⑥自然などの身近な事象に関心をもち、遊びや生活に取り入れようとする。
- ⑦身近な動植物に親しみをもち、いたわったり、大切にしたり、作物を育てたり、味わうなどして、生命の尊さに気付く。
- ⑧身近な物を大切に作る。
- ⑨身近な物や遊具に興味を持って関わり、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。
- ⑩日常生活の中で数量や図形などに関心を持つ。
- ⑪日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心を持つ。
- ⑫近隣の生活に興味や関心を持ち、保育所内外の行事などに喜んで参加する。

3歳以上の保育内容に関しては幼稚園教育要領と整合性を図っており、共通する部分も多いが、保育所保育指針独自の項目といえるものは、①②⑫である。特に②では、⑨の項目とは別に「好きな玩具や遊具」という言葉が取り入れられている。

3. 養成課程における「保育内容 環境」授業の現状

(1) 調査対象・方法

「保育内容 環境」科目に関するシラバスを分析し、比較検討する。ウェブ上にカリキュラムおよびシラバスが公開されている、全国の保育者養成課程（幼稚園教員養成課程および保育士養成課程）を備える4年制大学13校、短期大学（大学の短期大学部を含む）24校の計37課程を対象とし、「保育内容 環境」科目のシラバスおよび使用テキストの内容を分析する。なお、科目名は養成課程により「保育内容指導法（環境）」「環境指導法」などとするものも含む（表1-1）。

表1-1 授業科目名

科目名	数
保育内容(環境)	18
保育内容論(環境)	1
保育内容(環境Ⅰ)	2
保育内容の指導法(環境)	2
保育内容指導法(環境)	2
保育内容演習・環境	2
環境	1
保育内容指導法演習(環境)	1
保育内容の研究・環境	1
保育内容の研究(幼児の環境)	1
保育内容研究Ⅰ(こどもと環境)	1
環境指導法	3
保育内容(環境)の理論と方法	1
保育内容環境(保育・教育の内容)	1
計	37

(2) 授業計画の内容について

授業計画に示された内容の項目を分類したものが表1-2である。シラバスに示されている文言から具体的な授業内容が明確にはわからないものもあるが、おおよその分類とその項目が扱われている対象全課程における総コマ数を示している。調査対象の課程では概ね15回授業であり、その前半の回では、「領域 環境」についてや「子どもの発達と環境」についての学習内容が多くを占めている。そして後半の回では、「人的環境」、「物的環境」、「自然環境」他についての学びとなることが多いが、全体のコマ数において、やはり自然環境の学びが他の項目に比べ圧倒的に多いことがわかる。

学習内容の中で、「自然環境」について学ぶ項目と「室内環境」について学ぶ項目に絞って各課程の設定コマ数を比較したものが、表1-3である。15回の授業中でそれぞれが何コマずつ扱われているかを示している。自然環境については3～5コマ設定している課程が最も多く、平均して4.2コマである。最も多い所では、自然体験の実践を連続して12コマに渡り行っている。室内環境については1コマの設定が最も多く、6コマ以上設定しているところはない。平均は1.3コマである。室内環境の学習をシラバスの内容として載せていない課程も10ヵ所ある。また、室内環境の学習において、「遊具を取り上げているか」といった具体的学習内容をシラバスから読み取ることは難しい。そのため、使用テキストからその詳細について把握することを試みる。

表1-2 授業計画の内容

内容の概要	全体のコマ数
オリエンテーション・ガイダンス	24
領域「環境」	50
保育内容「環境」	25
環境構成・環境整備	20
環境	32
子どもの発達	45
幼児理解	9
事例・実習・実践・グループ活動・模擬保育	47
生活・遊び・行事	23
指導計画	17
人的環境	23
自然環境	164
園外環境・園庭	6
室内環境	49
数・量・図形・文字	28
地域・社会・文化・施設	18
安全	10
課題・変遷	9
その他	16
復習・試験・まとめ	35

表1-3 自然環境、室内環境のコマ数比較

	15回授業中の設定コマ数							
	0	1	2	3~5	6~8	9~11	12~	Av
自然環境	2	4	4	19	3	4	1	4.2
室内環境	10	15	7	5	0	0	0	1.3

(3) テキストについて

室内環境の学習の具体的内容を探るため、シラバスに数多く挙げられていた使用テキストを比較検討する。テキストとして4ないし3課程で共通に採用の記載があった4社のテキストについて、大まかに分類した各項目ごとのページ数を示したものが表2である。

さらに、室内環境や遊具の項目のページ内容の詳細についてみると、A社は素材とのかかわりが中心であり、遊具（文中表記は「おもちゃ遊び」）については具体的な名称はなく、数行触れられている程度である。B社は、玩具を使った水あそびの事例、C社は、幼児の積み木あそびに関する事例の考察と保育者の援助について記述されている。D社は園具・遊具類の分類と保育環境のデザインについて述べられているが、分類中には積み木やままと道具等のいわゆる玩具は含まれていない。

表2 各社テキストにおける項目ごとのページ数比較

出版社名	領域・保育内容	生活・遊び・行事	指導計画	人的環境	自然環境	室内環境	数量・図形・文字	地域社会・文化情報・施設	安全
A社	36	7	6	2	79	16	18	12	4
B社	109	0	0	0	25	9	16	6	0
C社	57	7	0	0	18	8	3	4	0
D社	62	0	0	10	14	24	7	21	10

(4) 考察

今回の養成課程の授業内容に関する調査では、室内環境、中でも遊具についての学びは極端に少ないことが明らかになった。幼稚園教育要領、保育所保育指針において示されている領域「環境」の内容の項目は、やはり自然とのかかわりが多いのであるが、そのみではない。子どもを取り巻く全ての人や物、社会の事象を含めた環境とのかかわりを含んでいるのである。それだけに、保育者は自然環境以外にも、人的環境、物的環境、地域社会・文化等様々な子どもを取り巻く「環境」に目を向けなければならない。子どもの日常で触れる物的環境だけでも、園具・遊具・素材と様々

であり、遊具も戸外の固定遊具、室内でも粗大運動のための大型遊具から手で扱う遊具である玩具まで幅広い。また、子どもの遊びが一人ひとりに合わせたものであるためには、多種多様な遊びが想定されなければならない。2年ないし4年の限られた修業年限の中で、それらに関する知識を全て網羅することは難しい。しかし、積み木や人形、ままごと道具といった日常の身近な遊びを支える室内遊具は、子どもの遊びに欠かせないものであり、多くの園で保育室内に共通して置かれているものと考えられる。保育者となる者には、せめてそれらに関する基本的な事柄の理解は必要とされるのではないだろうか。

4. 室内遊具と保育環境

遊具を用いた幼児の室内遊びは、大きくは次の5つに分類することができる。「操作的遊び」「構成遊び」「ごっこ遊び」「ルールのある遊び」「その他の遊び」である。「操作的遊び」は握る、叩く、つまむなどの動作をとまなう手を使う遊びであり、そのための遊具にはひも通しや型はめ、リリアンや織り機などがある。「構成遊び」は積み上げる、並べる、組み立てるなどの構成力を身につける遊びであり、遊具は積み木、色板、ブロックなどである。「ごっこ遊び」は物を何かに見立てたり、役割を演じたり、社会を模倣する遊びであり、食器や食材などのままごと道具や人形、お医者さんごっこの道具などがある。「ルールのある遊び」はルールを理解し、考える力や社会性を養う遊びであり、パズルやカードゲーム類がこれにあたる。「その他の遊び」としては五感を刺激し感覚を育む、見る、聞くといった遊具や、粗大運動の遊具などがあげられる。

室内遊具は、発達や遊びの観点から選ぶことが望ましい。構成遊びの代表である積み木を例にあげれば、0歳児には布製の軽くて安全なものなどが適している。2歳頃になると、しっかりつかむことができるようになるため、木製で基尺が5cmくらいの大き目の積み木が遊びやすい。また、この時期は色への関心が強いいため、白木よりもはっきり彩色されたカラーのものが興味をひきつける。幼児期になれば、高く積み上げたり、城のように形作ったりするため、基尺（積み木を構成する上で基準となる尺度）が統一されており、正確に作られていることが重要である。そして、白木の積み木の方がすべりにくく、イメージを広げやすい。このように、素材や色、デザインなどは、子どもが最も遊びやすいものを選ぶ必要がある。また、3歳以降、平行遊びから連合遊び、協同遊びへと遊びが発展するためには、十分な数があることも大切である。積み木遊びのコーナーを室内に設置する場合には、人の出入りの激しい入り口付近ではなく、年齢が高くなるほど何日も継続して作り続けることができるよう、保育室の奥に広い場所を確保する必要がある。

室内で展開されるそれぞれの遊びの関係性を考えて室内環境を構成し、室内遊具は子どもたちの遊びの様子を見ながら随時入れ替えていくことも必要である。人形やままごと道具、ゲーム類等それぞれに対象年齢に合わせた選び方や留意点があり、それらを配置する際にも知っておくべき配慮がある。子どもの遊びを支え、保障することは、保育者の重要な役割である。そしてそれは、それぞれの年齢発達に合わせた遊びと遊具について理解することなくしては成り立たないといえるのである。

5. おわりに

ヨーロッパ等に比べ、日本においては未だ遊具、玩具は価値の低いものとして扱われがちである。しかし、保育の専門職として保育者となる者がその価値を認識し、子どもの発達に与える影響を理解しておくことは、重要なことであるといえる。

「保育内容 環境」で取り上げるべき項目は多岐に渡り、15回の限られた授業内で全てを網羅することは困難である。自ずと内容は厳選しなければならない。しかし、保育が子どもの遊びを中心とするならば、保育者は室内遊具を用いた環境構成についても学ぶ必要があるのではないかと考える。各養成校においては、「保育内容 環境」以外の他の科目において、室内環境の構成や遊具について詳細を学べるよう設定するなどカリキュラムを工夫しているところもあるとは考えられるが、子どもの育ちを支える重要な環境である室内遊具、玩具について、学ぶ必要性をより認識していくことが望まれる。

参考文献

- 1) 民秋言『幼稚園教育要領・保育所保育指針の成立と変遷』萌文書林（2008）
- 2) 文部科学省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館（2008）
- 3) 厚生労働省『保育所保育指針解説書』フレーベル館（2008）
- 4) 上村眞生「保育所における『おもちゃ』の意義に関する研究 -対象乳幼児の年齢とおもちゃの形状からの検討-」西南女学院大学紀要Vo13（2009）
- 5) 瀧薫『保育とおもちゃ -発達の道すじにそったおもちゃの選び方-』エイデル研究所（2011）
- 6) 姜華「幼稚園教育要領における教育内容の変化に関する一考察 -領域『環境』の内容分析を中心にして」早稲田大学大学院教育学研究科紀要 No20-2（2013）
- 7) 坂本渉「幼児の『ままと遊び』における環境構成についての一考察」プール学院大学研究紀要No54（2013）
- 8) 高山静子『環境構成の理論と実践 -保育の専門性に基づいて-』エイデル研究所（2014）
- 9) 奥村典子・塚越亜希子「保育者養成課程における領域『環境』の教授法の検討」関東短期大学紀要No57（2015）
- 10) 郭小蘭「幼児教育現場の教材から見た幼児の遊びの指導法」会津大学短期大学部研究紀要No73（2016）